

## 企業遺伝子の形成および継承過程とその影響に関する研究

吉 村 孝 司

本研究は、企業経営における現象の遺伝子としての企業遺伝子（情報因子）の存在と、その機能および企業 DNA（情報媒体）との関係を明確にすること、ならびにそれらの継承過程の解明を図ることを目的とするものであり、2011年度においては、前年度に実施した企業遺伝子アンケート調査（わが国を代表する企業としての日経225指数対象企業（以下、日経225企業）と、そのうちの創業100年±10年の企業（以下、100年企業）、および株式会社帝国データバンクの定義に基づく老舗企業（以下、老舗企業）を対象とするアンケート調査（本調査は本研究と同時に遂行している科学研究補助費交付研究課題番号22653046において実施）結果の分析と精査を引き続き行い、企業遺伝子ならびに企業文化、組織、戦略等からの分析を主とする理論研究を中心に実施した。

上記のアンケート調査に関しては、企業遺伝子に関する直接的な調査としては初めての試みとしての位置づけが可能と思われ、そこから得られた結果に関してはつぎに示すような興味深いものであった。まずアンケート対象の3カテゴリーの企業総数のうちの62%が「企業遺伝子の存在」に肯定的であることが判明した。なかでも100年企業においては71.4%と反応が顕著であり、創業期間の長期化

の過程において独自の企業遺伝子への関心が高まり、遺伝子型経営への移行傾向がうかがえる結果を得た。また本年度における継続的分析作業の結果として、企業遺伝子には異なる2種の遺伝子が存在している可能性を確認した。本研究ではこの2種の企業遺伝子を「日経225型企業遺伝子」および「老舗企業型企業遺伝子」と名づけ、前者は「その生成および浸透過程にある企業遺伝子であり、いまだその代替（組み換え）可能性を有するため、革新的挑戦や外部からの意見を取り込む余地を残し、経営環境の変化に最適な遺伝子として強化・継承されうるもの」と解されるのに対し、後者は「その継承過程にある企業遺伝子であり、経営環境との関連性において生成、継承されてきた結果、代替（組み換え）不可能なレベルまで昇華されているため、その継承を最大の課題とし、革新的挑戦や外部からの意見からの乖離性が見られるもの」と解される。

また本研究におけるアンケート調査には対象企業からの記述回答も含まれており、各回答企業による企業遺伝子概念とその具体的構成要因に関する言及を得た。それによれば日経225企業においては制度化された経営理念に基づく経営志向が強く、100年企業においては企業経営における精神的準拠基盤の形成傾向が、老舗企業においては商品および創業地等の物理的ドメインへの回帰・固執傾向が強化されることがうかがえ、こうした精神的、信教的因子に関する分析を継続させることを今後の課題として位置付けることとする。

以 上